

あいづち使用の中日対照研究 - 談話分析の観点から

-

著者	呂 萍
号	10
学位授与機関	Tohoku University
学位授与番号	国博第132 号
URL	http://hdl.handle.net/10097/59212

LU
呂

PING
萍

学位の種類	博士（国際文化）
学位記番号	国博 第 132 号
学位授与年月日	平成24年 3 月27日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期 3 年の課程） 国際文化交流論専攻
学位論文題目	あいづち使用の中日対照研究 － 談話分析の観点から －
論文審査委員	（主査） 教授 上 原 聡 教授 長 友 雅 美 教授 佐 藤 勢紀子 准教授 中 本 武 志 講師 張 立 波 （高等教育開発推進センター）

論文内容の要旨

1. 本論文の構成

本論文の構成は以下のとおりである。

第 1 章 序論

第 2 章 あいづちに関する先行研究およびその問題点

第 3 章 本研究における方向性

第 4 章 中国語会話におけるあいづちの使用実態

第 5 章 日本語会話におけるあいづちの使用実態

第 6 章 中日両言語におけるあいづち使用の対照およびその考察

第 7 章 結論

第 1 章では、本研究の目的および研究方法を紹介する。

第2章では、あいづちの頻度、表現形式及び出現位置に関する先行研究を取り上げ、その研究成果を紹介しつつ、それぞれの問題点を指摘する。主に対照言語学的な観点から分析を行ったものを重点的に概観したうえで、本研究の課題をより明確に提示する。

第3章では、本研究におけるあいづちの定義、および表現形式、出現位置とターン交替形式の分類を行う。

第4章、第5章では、それぞれ中国語と日本語の電話会話と対面会話に出現するあいづちの全体的な使用実態を解明し、更に3タイプのあいづちの使用頻度、表現形式および出現位置を明らかにする。最後に、中国語と日本語会話に使用されるあいづちについて、それぞれ親疎関係および会話の形式が電話か対面かによる使用頻度、表現形式と出現位置の異同を明らかにする。

第6章では、親疎関係および会話の形式が電話か対面かによって、中日両言語における各タイプのあいづち使用の異同を明らかにし、全体的なあいづちの使用実態について考察を試みる。

最後に、第7章では、中日両言語におけるあいづちの使用実態について結論を述べ、今後の課題を提示する。

2. 研究目的

日本語のあいづちは、それぞれの談話において話題の内容、話し手と聞き手との関係、媒介、性別、年齢などによって、ダイナミックに変化するものである（松田1988, 堀口 1997）。例えば、少年層より壮年・老年層のほうが（黒崎1987）、対面会話より電話での会話のほうが（宮崎2002）あいづち頻度が高くなる傾向にあると指摘されている。しかし、中には反対の結果が出ているものもある。例を挙げると、対面会話のほうが電話による会話¹より（楊2000）、同年代や年下の会話者のほうが年上の会話者より（宮崎2002）あいづち頻度が高いなどである。ただし、これらの研究は要因が一定でなかったり、研究方法が異なったりするため、実際はどの要因が影響し、あいづちの使用実態はどうなっているのかについては必ずしも明らかになっていない。

小宮（1986）は対面の会話では時間と共に「ン系」が増えるのに対し、電話の会話では「ハイ」という相手を非常に意識するあいづちが減ると同時に、意識が自己の内面に向かう「ハー」が増えると報告している。つまり、日本語のあいづちは電話か対面かによって表現形式の使用が異なると言えよう。しかし、あいづちの使用頻度および出現位置が電話か対面かによって影響されるかどうかは明らかになっていない。また、橋本（1992）、李（2008）は依頼場面のストラテジーを選択する際に、日本語母語話者は上下関係に、中国語母語話者は親疎関係に敏感に反応すると述べている。言い換えれば、依頼場面の会話において、日本語母語話者と中国語母語話者は親疎関係によっ

1 電話による会話を以下では電話会話と呼ぶ。

て異なる対応をする傾向にあると言える。しかし、橋本（1992）、李（2008）は依頼場面のストラテジーに関する研究であるため、あいづちの使用実態が親疎関係によって影響されるかどうかまでは言及されていない。

さらに、日本語のあいづちは中国語より全体的に高頻度で使用されていると言われている（劉1989、楊1999b など）が、従来の研究では要因が一定していなかったり、実際のデータが少なかったりするため、実際にどの要因が影響するのか、いかなるあいづち使用がなされているのか、十分に明らかになっているとは言えない。

そこで、本研究では、中国語母語話者と日本語母語話者を対象に、親疎関係を設定し、電話会話と対面会話のデータを収集した。それらのデータの中に使用される中日両言語のあいづちの全体的な使用実態を明らかにすることを本研究の目的とする。具体的には、以下の2点を明らかにする。

- (a) 親疎関係によって中日両言語それぞれの会話において、あいづちの使用頻度、表現形式と出現位置はどのように変化するのか、どのような類似点と相違点があるのかについて考察を行う。
- (b) 電話か対面かによって中日両言語それぞれの会話において、あいづちの使用頻度、表現形式と出現位置はどのような特徴があるのか、またどのような類似点と相違点があるのかを解明する。

以上の2点を明らかにし、中日両言語におけるあいづちの相違点が生じる原因を探る。

3. 研究方法

本研究では、電話会話と対面会話におけるあいづちの使用実態を明らかにするために、2種類のデータを収集し、文字化した。松田（1988）、堀口（1997）らは、あいづちの頻度は話のタイプ（雑談的、討論的等）によって異なると指摘している。そこで、本研究では、身近なことに限る気軽な話に限定するため、留学・仕事・勉強を話題に設定した。2006年12月から9月にかけて、日本語母語話者と中国に在住の中国語母語話者を調査対象として、初対面同士と友人同士という設定で、電話会話を約15分~20分録音した。さらに、2010年2月から10月にかけて、日本語母語話者と中国に在住の中国語母語話者を調査対象として、同様に、初対面同士と友人同士という設定で、対面して15分から20分程会話をしてもらった。

会話協力者は時間が経つにつれて、録音、録画されていることに慣れ、徐々に自然の形に近くなると一般的に考えられている（メイナード1993など）。このような談話分析の方法に基づき、日常会話の自然の姿により近いものを分析するため、会話開始からの2分間を除外した。それに加え、本研究で設定した話題に関係がない部分を取り除き、話題が始まったところからデータとして抽出

した。抽出したデータの文字起こしは宇佐美（2005）に従って行った。

以上の資料を書き起こした自然会話のデータを分析する際に、より客観的に差が有意であるかどうかを示すため、統計を用いた。

4. 本研究における方向性

4.1 本研究におけるあいづちの定義と表現形式の分類

本研究では、メイナード（1993）および堀口（1997）の定義を参考に、機能、表現形式と出現位置の観点から、あいづちを以下のように定義する。

話し手が発話権を行使している間に、または話し手の発話の終了した後に、聞き手が話し手から送られた情報を共有したことを伝える短い表現²である。

したがって、以下のようなものは本研究ではあいづちとみなさない。

- (a) 話し手が積極的に応答を求めるものに対する答え（質問、命令、呼びかけなどに対する答え）
- (b) 聞き手が上昇イントネーションで相手の応答を求めるもの（説明要求、確認要求などのもの）

上記の定義に従い、中日両言語の会話に出現するあいづちを抽出し、分析を行った。その際、松田（1988）の表現形式の分類方法に基づき、あいづちの表現形式³を、「あいづち詞」、「繰り返し」、「言い換え」、「コメント」の4種類に分類した。さらに、「あいづち詞」を「感声的表現」「概念的表現」に分類した。

4.2 出現位置の分類

本研究では、Clancy, et al.（1996）と楊（2008）の「文」の定義に基づき、相対的にまとまった意味を有し、やや大きなポーズを置き、明白な述部を持つものを「文」として扱う。省略された節と質問に対する答えも「文」と認める。「文末」とは節や文の終わりの場所を指すが、相手の発話の途中においてまとまった意味を有し、ポーズがある場所にあいづちが打たれることがある。本研

2 「短い表現」はメイナード（1993）で用いられたものであるが、ここではそのまま踏襲する。「はい」「うん」「そうだね」「嗯 en」「啊 a」「对 dui」などの短いもの以外にも、「それはそうだろうけど」「そういうもんだね」「是这样啊（そうなんですか）」「是这么回事啊（そういうことなんですか）」などのようなものも「短い表現」に入れるが、あいづちの他の条件を満たしていないものは「短い表現」に入れない。

3 撮影の条件が限られているため、非言語行動を把握するのが困難である。そこで本研究では、非言語行動の部分を分析の対象から排除する。言語行動のみを取り上げ、データ分析を行うことにする。

究では、このような場所は「文末」と見なす。「文中」とは、まとまった意味を有するが、ポーズなしで相手の発話と重なる場所と、まとまった意味を有していない場所を指すものである。そのため、「文中」に使用されるあいづちの出現位置を、Clancy, et al. (1996) が提示した「Grammatical Completion」という概念に基づき再分類し、あいづちの出現位置の全貌を明らかにする。

さらに、本研究では、「文中」に使用されるあいづちの出現位置を「文法的完了点」と「文法的未完了点」に再分類する。「文法的完了点」は、文法的に完結しており、まとまった意味を有するが、ポーズなしで相手の先行発話と重なる場所を指し、「文法的未完了点」は文法的に完結しておらず、まとまった意味を持たない場所を指す。

4.3 ターン交替形式

本研究では、中日両言語の会話において、ターン交替時にターンの冒頭に出現するあいづちの使用実態を明らかにするために、両言語のターンの仕組みおよびターン取得のあいづちとターン交替形式との関係を説明することが必要であると考えられる。そこで、本研究では、樋口（2009）の定義に従い、ターンを「話し手の発話開始により始まり、他者の発話あるいは明らかなポーズによって終わるひとまとまりの発話」と定義する。Sacks 他（1974）は、ターン交替のほとんどがスムーズに行われる場合には、ターン交替に関する原則があることを示した。概ね「他者選択」「自己選択」「再保持」の3つの規則にまとめることができるという。

Sacks 他（1974）のターン交替のメカニズムによって、「他者選択」は発話を促すような表現や質問によって現れるターンであるため、その冒頭に出現するあいづち的なものは、発話を促すような表現や質問に対する返答となる。したがって、本研究では、「他者選択」の冒頭に使用されるあいづち的なものは、あいづちとしない。つまり、本研究では、「自己選択」「再保持」のターン交替形式とあいづちとの関連性を探る。

5. 研究の結果

5.1 考察およびまとめ

本研究では、留学・仕事・勉強を話題に設定し、調査対象者を20代の母語話者に限定し、録音を行った。書き起こした自然会話におけるあいづちの使用実態について、親疎関係および会話の形式（電話か対面か）の2要因を考慮しながら、統計を用いてそれぞれ分析した。さらに、中日両言語におけるあいづちの使用頻度、出現位置および表現形式についての類似点と相異点を示し、談話分析の観点から両言語の使用頻度の相異を生み出す原因について考察を行った。

5.1.1 あいづちの使用頻度

本研究では、中日両言語の会話に使用されたあいづちの全体的な使用頻度について、人間関係および会話の形式の2要因に限定して考察を行った。その結果は以下のようにまとめられる。

あいづち使用頻度について、中国語と日本語の会話において、類似している状況が見られた。中国語の会話であれ、日本語の会話であれ、初対面同士による電話会話に使用されたあいづちの使用頻度が、最も高いことが明らかになった。つまり、「疎」の関係および表情などが見えない「電話」という2要因が揃った場合の会話は、揃わなかった場合の会話と比べ、使用頻度の差が出現した。日本語の会話において、その差は統計的に有意に至らなかったが、「疎」の関係および「電話」という要素は、中国語の会話においても、日本語の会話においても、あいづちを増やす要因として働いていると考えられる。

一方、中日両言語の会話において、あいづち使用の相異も見られた。親疎関係および電話か対面かの2要因を考慮したすべての会話において、中国語の場合、初対面同士による電話会話に使用されたあいづちの頻度は最も高いが、日本語のあいづち頻度の最も低い会話より低くなっている。つまり、日本語の会話におけるあいづちは、中国語よりずっと多く使用されていることが明らかになった。

また、中国語の対面会話におけるあいづちは、友人同士の場合より初対面同士の場合の使用頻度が高い。電話会話におけるあいづちの使用頻度は、親疎関係によって影響されない。さらに、電話会話と対面会話に使用されたあいづちについては、友人同士の場合、対面会話より電話会話の頻度のほうが高い。一方、初対面同士の場合は、電話会話と対面会話におけるあいづちの頻度は、差が有意に至らなかった。それに対し、日本語の会話に使用された全体的なあいづちの頻度は、親疎関係および電話か対面かによる差が統計的に有意に至らなかった。つまり、中国語の会話におけるあいづちの使用頻度は日本語より親疎関係および電話か対面かに影響されやすいと考えられる。言い換えれば、日本語の会話においては、友人と話す時は初対面の人と話す時と、対面会話の時は電話会話の時と、あいづちは頻度がほとんど変わらず、すべての場面で、中国語より頻繁に使用されている。

5.1.1.1 機能による3タイプのあいづち

本研究では、ターンを取るかどうかという機能によって、あいづちをターン放棄のあいづち、ターン譲り合いのあいづちおよびターン取得のあいづちの3タイプに分類した。あいづちの全体的な使用頻度は中国語より日本語のほうが遥かに高い。タイプ別のあいづちの使用頻度を分析した際に、ターン取得のあいづちは、友人同士による対面会話の場面以外、使用頻度が中国語と日本語とほとんど変わらない。つまり、親疎関係および電話か対面かにかかわらず、中日両言語におけるあいづちの使用頻度の差は、ターン放棄のあいづちとターン譲り合いのあいづちによるものと判明した。

5.1.1.1.1 ターン取得のあいづちとターン交替形式との関係

本研究では、友人同士による対面会話においてのみ、ターン取得のあいづちの頻度は日本語より中国語のほうが低い。その原因を探るため、ターン取得のあいづちとターン交替形式の関係について考察を加えた。

ターン取得のあいづちが「自己選択」「再保持」の総ターン交替形式に占める割合は、親疎関係および電話か対面かにかかわらず、中国語と日本語との差がほとんどないことを明らかにした。つまり、親疎および電話か対面かに関係なく、ターン交替に際して、中国語の会話と日本語の会話はほぼ同じ頻度で、あいづちを入れながら相手のターンを獲得すると言える。中国語の友人同士による対面会話において、「自己選択」「再保持」のターン総数が少ないため、ターン取得のあいづちの使用頻度が少なくなると解釈できる。さらに、中国語の友人同士による対面会話におけるターンが少ないことは、中国語のあいづちが少ない理由の1つとして考えられる。更なる検証が必要であるため、今後の課題にしたい。

5.1.1.1.2 ターン放棄のあいづちの出現位置

本研究では、中日両言語において、ターン放棄のあいづちはあいづち総数に占める割合が約7割であり、出現数が最も多いものである。あいづち総数の約7割に及ぶターン放棄のあいづちの出現位置について考察を行った。次のようにまとめられる。

中日両言語におけるターン放棄のあいづちの出現位置について、類似点が見られた。中日両言語とも、親疎関係および電話か対面かにかかわらず、主に、まとまりの意味を有する「文末」であいづちを用いる傾向がある。

親疎関係や電話か対面かにかかわらず、「文末」「文中」に使用されたあいづちの頻度は中国語より日本語のほうがずっと高いが、「文末」に使用されたあいづちがターン放棄のあいづちの総数に占める割合は、日本語より中国語のほうが大きい。つまり、中日両言語とも、あいづ

ちは主に「文末」に用いられる傾向があるが、中国語のターン放棄のあいづちは「文末」で打たれた傾向が日本語より顕著である。

一方、親疎関係および電話か対面かにかかわらず、「文中」に使用されたあいづちがターン放棄のあいづち総数に占める割合は、日本語が中国語の3倍か4倍程度大きい。この結果から、中日両言語におけるターン放棄のあいづちの使用頻度の差は、「文中」に使用されたあいづちにもよるものと判明した。具体的には、「文中」の「文法的完了点」に使用されたあいづちは、中国語より日本語の頻度が高い。言い換えれば、発話進行中、先行発話と重なる形で打たれるあいづちは、中国語より日本語のほうが多い。また、「文法的未完了点」に使用されたあいづちも、中国語より日本語の会話において多く用いられている。つまり、日本語の会話において、意味がまとまらない位置で打たれたあいづちの頻度が、中国語より高いと言える。

日本語会話の「文中」においては、親疎関係および電話か対面かを問わず、「文法的完了点」の後に定型的文型やモダリティーを表す助動詞に相当する表現などが付くが、そのような表現は中国語会話においては述語動詞の前に来るため、まとまりの意味を持たない。したがって、中国語と比べ、日本語の多様な文末表現は重複が多く発生する要因にもなりうると考えられる。「文法的未完了点」におけるあいづちは、中国語会話では出現回数が少ないが、主に名詞の後に使用される。一方、日本語は格助詞や接続助詞などがあるため、「文法的未完了点」におけるあいづちは、主に「名詞＋助詞（は、が、に、で、とかなど）」および名詞の後に使用される。「文法的未完了点」に使用されるあいづちは、中国語と日本語共に、「感声的表現」が多く用いられる。具体的には、中国語会話では、「嗯」が、日本語会話では、友人同士の場合は「うん」が、初対面同士の場合は「はい」が用いられる。

5.1.2 あいづちの表現形式

本研究では、中日両言語の会話におけるあいづちの表現形式については、下記のように述べられる。

あいづちの表現形式には親疎関係および電話か対面かにかかわらず、中国語の会話であれ、日本語の会話であれ、高頻度で使用されるものと低頻度で使用されるものがある。具体的には、上位2、3種のあいづちがそれぞれのあいづち異なり総回数の約5、6割を占める表現形式と、種類数が表現形式の総種類数の約5割にのぼるが、1回しか使用されない表現形式がある。

中国語の会話においては、電話か対面かによって、表現形式の使用が異なる傾向がある。つまり、中国語の対面会話より電話会話における「嗯」系、「啊」系が多く使用されている。それは、音声を頼りにするしかない電話会話において、対面会話の場合より頻繁に相手に「聞いている」ことを示すためだと言える。それに対し、日本語の会話においては、親疎関係および電話か対面かにかか

わらず、中国語の会話より「感声的表現」の「うん」系、「あー」系が好まれる傾向がある。それは、日本語の会話において、「文中」の「文法的未完了点」に用いられたあいづちが、中国語の会話より多いことと、発話者は常に相手に「聞いている」ことを示しながら会話を進めることによると考えられる。

中日両言語の電話会話と対面会話に使用されるあいづちの使用表現については、日本語の表現形式の種類は、親疎関係と電話か対面かによらず、中国語より2倍程度多い。Iwasaki (1997) が指摘するように、日本語のあいづち表現は閉じたものではなく、個人が自由に作り出すことができるものである。例えば、日本語の会話において、「そう」が基本になる形のあいづちを見ると、反復型や話者の推量、モダリティ、「よ、ね、よね、な、か」などの終助詞、普通体と丁寧体といった様々な要素が重ねられ、結果的に「そうですね」「そうですよね」「そうなんですね」などの様々な種類の表現が作られる。一方で、中国語の会話においては、「是」「对」が基本になる形のあいづちを見ると、反復型や「啊、呀、吧、嘛」のような終助詞が重ねられ、「是啊」「对啊」「是嘛」などの種類が作り出される。以上のことから、日本語のあいづち表現を形成する要素は中国語より遥かに多いと言える。これは、日本語のあいづちの種類が中国語より豊富である理由の1つと言えよう。

5.1.3 中日両言語におけるあいづち頻度の差を生み出す原因

本研究では、中日両言語におけるあいづち頻度の相異が生じる原因については、談話分析の観点から以下のようにまとめることができる。

日本語の会話において、中国語の約2倍以上ターン放棄のあいづちが使用され、中国語の会話においては、相手が発話権を行使している間に聞き手から送られたあいづちは非常に少なかった((1)を参照)。これが日本語のあいづち頻度が中国語より高い理由の1つであろう。

(1) 友人同士による対面会話

TA: 它针对我们国情, 像美国人,,

TB: 嗯

TA: 美国人是什么, 就是美国人想把什么都做大, 我做东西就要把他做大,,

TB: 对呀

TA: 中国人不是, 中国人是宁做鸡头不做凤尾, 他宁愿做一些小企业的老板他也不去做那种大企业的跟班, 所以中国有太多太多中小企业, 所以他觉得做那些就是小, 给中小企业做那种大范围的东西, 所以创造的是另一种模式, 其实我觉得不是你完全地模仿, 其实我, 我不, 不是说反对你去, 你为什么要瞪我。

訳文:

TA: 技術などはわれわれの国情に合わせるべきだよ。アメリカ人みたいな..

TB:

うん

TA: アメリカ人はなんっていうか、何をやっても大規模に発展させなきゃっていう..

TB:

そうだね

TA: 中国人はそうじゃない、中国人は鳳凰の尾になるより鳥の頭になりたがってる。大手企業の社員になるより、小規模の企業の社長になりたがってるから、中国の中小企業は多すぎるんだよ。だから、中小企業は大幅に力を発揮できるように、彼は今までと異なったモデルにしたの、実は完全にまねするんじゃないくて、まあ、留学に反対するわけじゃないけどね、なんで睨んでるの？。

水谷（1988）が指摘しているように、日本人の会話スタイルは「共話」である。「共話」的なスタイルの特徴として、話し手が自ら会話を完結させるのではなく、話し手と聞き手を区別せず、2人で会話の流れを作っていくのである。それは「共話」での聞き手の姿勢である。日本語の会話において、ターンの途中で打たれるターン放棄のあいづちが多いことは、「共話」的な会話スタイルによると考えられる。聞き手が話し手の発話途中であいづちを入れ、共同で1つの発話を完結させるのである。一方、水谷（1993）では、「対話」的なスタイルの特徴として、話し手は自分の発話を完結させてから、相手の話を聞くという形であり、聞き手は話し手の発話が完結するまで黙って聞くのであると述べられている。呂（2009）は中国語の会話スタイルは「共話」より「対話」に近いと指摘している。相手の話を黙って聞くという「対話」の性格によって、中国語の会話において、相手のターンの途中で使用されたターン放棄のあいづちが少ないと考えられる。

日本語にあいづちが多いもう1つの理由は、ターン譲り合いのあいづちが中国語より遥かに多いことである。日本語の会話において、ターン譲り合いのあいづちが最も多く用いられた場合は、11回連続して出現したが、中国語の会話においては、最も多く使用された場合は、3回しかなかった。中国語の会話のすべての場面にわたって、ターン譲り合いのあいづちがほとんど用いられなかった。つまり、会話者の間に話題の展開がないとき、沈黙を回避し、「人間関係が途切れてしまう気持ちになるのを防ぐため」（メイナード1993:172）、相互に協力し合い、ある一定の交代リズムを保つ傾向が中国語より顕著である。おそらくこれが日本語のあいづちの多さを作り出している理由の1つであろう。

また、日本語会話において、「文中」に使用されたあいづちがターン放棄のあいづち総数に占める割合は、日本語が中国語の3倍か4倍程度大きい。つまり、日本語の会話では、「文法的未完了点」にあいづちを入れたり、ときには相手の話と重なりあいづちを打ったりすることは中国語より多

い。それは日本語の「共話」での聞き手の姿勢の表れである。まとまりの意味を持たない位置でも相手に「聞いている」ことを示しながら会話を進める。それに対し、中国語の会話においては、聞き手は「文中」であいづちをほとんど打たずに黙って聞く姿勢を保っている。これは「対話」的な会話スタイルによると言えよう。

5.2 今後の課題

今後の課題として、以下の2点が挙げられる。

まず、本研究では、主にあいづちの全体的な使用頻度、出現位置および表現形式の使用実態について分析を行ったが、あいづちは会話の進行中に具体的にどのような役割を果たしているか、個々のあいづち表現形式の機能を明らかにする必要があると考えられる。

また、本研究では、言語行動としてのあいづちのみを対象として分析を試みたが、実際の対面会話における、「うなずき」などの非言語行動の使用実態を明らかにすることによって、電話会話と対面会話におけるあいづちの使用実態はさらに明らかになると考えられる。したがって、今後は、非言語行動を研究の対象に加え、さらに分析していきたいと考えている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、自然な会話の進行を助ける機能を有し、英語などに比して特に日本語の会話において使用頻度が高いとされる「あいづち」を対象とし、これまで体系的に行われることのなかったその中日語間の対照分析によって両言語間の異同を総合的かつ実証的に解明したものである。

日本語のあいづちに関する先行研究は多いが、本研究は、それらの研究手法・研究結果を整理再検討した上で、中国語のあいづち分析に日本語の研究で得られた研究手法をより汎言語的な形に発展させ応用しており、また中日語のあいづち分析において会話の形式（対面か電話か）と会話者間の親疎（友人か初対面か）の状況による差を同時に検証している。さらに、データとして4種の会話状況にわけて同世代の両言語母語話者計80組の約12時間におよぶ会話を収録して書き起こし、そこに現れた全あいづちの生起頻度を機能・形式・生起位置別に統計を用いて客観的に分析している。そこに本研究の特色・意義があり、その研究成果として多くの新知見を得ている。

具体的には、まず、全体のあいづち使用に関して、4種の会話状況全てにおいて日本語のほうが中国語よりあいづちの使用頻度が高いこと、また、会話状況間では、両言語を通じて電話より対面、疎より親の関係のほうがあいづち使用頻度が低いことが統計的に有意に低いのは中国語の対面・親の会話状況のみであることを検証している。その上で、両言語間の差異に関しては、機能別では発話

ターン取得を目的としないあいづちの使用が日本語に有意に多いこと、出現位置別では文末より文中、特に文法的未完了点に打たれるあいづちが日本語に有意に多いことなどから、両言語の会話におけるあいづち使用の果たす役割の差異にその要因があることを明快に論証している。さらに、中国語であいづち使用が有意に少ない会話状況においては話者選択のターン自体が少ないことなどをデータで示し、中日語間のあいづち使用の差が「対話」対「共話」というコミュニケーション・スタイルの差に関わるものであることを指摘している。

あいづちと非言語行動との関わりなど今後の課題として残る点もなしとしない。しかし、本論文は、膨大な量の自然言語データの収集・データベース化に始まり、当該分野の先行研究を踏まえて論理的かつ客観的な分析を進め、あいづち使用について、中・日言語学を含めた一般言語学の談話研究、また自然な会話運用能力の習得を目指す外国語としての日本語・中国語の教育の分野に寄与する新たな知見を提出し得ている。このことは、執筆者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。